



令和7年度日本病院薬剤師会医療情報システム講習会（Web）を受講して

福島労災病院薬剤部

金古 泰明 Yasuaki KANEKO

はじめに

2026年2月8日、令和7年度日本病院薬剤師会医療情報システム講習会（Web）が開催された。医療情報システムの安全管理に関するガイドライン第6.0版の発表や電子処方箋運用の開始など、医療情報分野の重要性は高まっている。私は昨年4月より院内の医療情報にかかわる委員会の一員となった。委員会では電子処方箋導入準備や電子カルテシステム更新後の不具合への対処といった活動をし、医療情報システムの基礎および最新動向を理解する重要性を感じた。今回、本講習会で医療情報分野の知見を広げたいと考え受講した（写真）。

講演

1. 医療情報システムに関する最近の話題

京都第二赤十字病院 岡橋 孝侍氏

医療情報・医薬品情報に関する基礎知識の確認から情報セキュリティと医療DXの今後の展望まで、幅広い解説があった。医療情報システムの安全管理に関するガイドライン第6.0版や医療機関におけるサイバーセキュリティ対策チェックリスト（令和7年度版）を例に、今後、IT-BCPの策定や2要素認証が必須化の傾向であること、施設間での6情報（傷病名・感染症・薬剤アレルギー・その他アレルギー等・検査・処方）の共有を目指し標準コードを利用した整備が進んでいることが解説された。

2. ここまではやっておきたい中小病院におけるIT-BCP

医療法人岩切病院 飯田優太郎氏

中小病院でIT-BCPを策定するにあたり、まずBCPとIT-BCPの相違を確認することが必要であると解説された。BCPとIT-BCPはどちらも緊急時に医療を停止することなく、患者の命と安全を守るための行動計画である点で共通しているが、その緊急時をもたらす要因が自然災害（BCP）またはシステム障害（IT-BCP）のどちらであるかが異なる。そのうえで、IT-BCPを策定する際、①確実に実行できることを目指す②最初から100点を目指す③やらないことを決めておく④薬剤師として守るべき機能に集中する、といった4つの観点を常に念頭に置くことが重要であり、病院全体だけではなく、薬剤



写真 講演の様子

部内の大まかなIT-BCP策定も重要であるとの見解が示された。さらに、そこから具体的に考えておくべき事柄として①指揮システムを明確にする②業務内容の優先順位を整理する③復旧後の事後処理における作業と手順を決める、などが挙げられ参考になった。

3. 大病院におけるIT-BCP

大阪大学医学部附属病院 西川 満則氏

大病院の視点からIT-BCP策定時のポイントについて述べられた。大病院のIT-BCP策定においては、ITが停止しても医療を継続できる仕組みづくりを目指す点で中小病院と変わらないが、組織が複雑で膨大な部門が関与するため、より属人的でないIT-BCP策定が求められるとの見解が示された。具体的には、指揮システムを明確にするだけでなく、対策本部やシステム復旧対応チーム、院内事務対応チームなど各方面に対応できるチーム編成や、復旧時に混乱を招かないよう段階的に事後処理を行うための準備が重要であると述べられた。また、IT-BCPの存在自体が重要である中小病院に対し、大病院においては組織が巨大であるため、IT-BCP自体が認識されていないことが多く、同じイメージを共有し機能させることが何より難しい、と述べられたことが印象的であった。

4. “深夜のシステム障害” どうマネジメント？正しい解とは～部門システム停止事例から考えるIT-BCP～

済生会横浜市東部病院 大幸 淳氏

実際に経験された深夜の薬剤部門システム障害を例に、反省点と次に向けての対策が示された。対策案とし

て①医薬品供給は完全にシステムに依存しない形を整える②システム構成を把握する薬剤師の育成③システムを細分化しバックアップ体制を整える④一般スタッフが実行可能なマニュアル化、の4点が示された。システム障害時は迅速かつ冷静な対応が求められるが、その場面に遭遇し初めてシステム障害時対応マニュアルを開くスタッフも多いと想像する。それを考慮し、薬剤部内でシステム障害時マニュアルを用いて定期的に基本事項の確認をする機会を設けることや、実践可能な必要最低限の記載で実行に移しやすいマニュアルの整備など、システム障害時にスタッフ全員が適切な行動をとれるような工夫を心掛けることが重要であると感じた。

5. 標準用法用語集 その歴史的背景と今後の行方

奈良県立医科大学附属病院 池田 和之氏

標準用法用語集策定の意義と現在の到達点について解説があった。現在、電子処方箋の運用や処方内容の情報共有システム整備が進むなか、令和7年2月に標準用法用語集（第2.2版）の発表があり、医療機関だけでなく、保険薬局でも応用可能かつ無駄のない用法用語集へ改訂された。また、標準用法には標準用法規格といった16桁のコードが割り当てられ、これが標準化の根幹を担っているが、今後はこの標準化されたコード利用を推進してリアルワールドデータベースを構築していく展望も示された。今後、医療DXの進展に伴い全国の医療機関や保険薬局において情報共有が進み、用法についても共通言語（標準用法用語集）の使用が必須となることを再確認した。

6. 電子処方箋 導入して気付いたこと

～薬剤名称・単位・用法マスタ等における注意点～

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院
鵜飼 和宏氏

自施設での電子処方箋運用に向けての試行錯誤と現状について述べられた。引き換え番号のみの電子処方箋運用の際、医療機関側のマスタ設定不備と薬局側のダミーコード薬品の紐づけ間違いに注意が必要であると解説があった。前者は医療機関において、YJコードからレセ

プト電算コードへの変換の際に別の医薬品が紐づけられ、意図する医薬品と別の医薬品が処方されてしまうという事例である。後者は、医療機関がダミーコードで登録した医薬品を保険薬局が紐づける際に誤った医薬品を登録してしまい意図する医薬品とは異なるものが調剤されてしまうという事例である。どちらの事例も、引き換え番号のみ記載の電子処方箋では、誤った処方・調剤に気付くのは困難である。そのため、電子処方箋の本格的な運用開始後、しばらくは引き換え番号付きの紙処方箋で運用するなどの対策が必要であるとの見解が示され、参考になった。

7. 情報システムを使いこなせる人になるためには？

情報システムを使いこなせる人を育てるには？

地方独立行政法人市立大津市民病院 山中 理氏

情報システムをうまく活用できる人材となるためのポイントについて解説された。まず、マインドセットとして、システムを受動的に使う作業者ではなくシステムを能動的に使う改善者へと変えることが重要であると強調された。そのうえで必要な能力として、①現場の不備とベンダーを取り持つ翻訳能力②業務をフローチャートで考えるプロセス可視化能力③どのようなデータがどこにどのように格納されているかといったデータ構造を理解するデータリテラシーの3点が挙げられた。どの能力も抽象的な事象を概観（可視化）し整理する能力である点で共通したのがあると感じた。また、組織としての人材育成についても述べられ、そのなかでシステム改善による時間創出効果やレスポンスタイムの短縮など、見えにくい貢献を可視化することにより院内での評価につなげる仕組みづくりが重要であると強調された。

最後に

本講習会を通じて、医療情報システムは薬剤師業務の基盤であり、医療安全や非常時の業務継続など多様な場面で求められることを改めて確認した。本講習会で知り得た知識をIT-BCP策定や標準用法用語集を用いたマスタの整備、電子処方箋運用などに生かし活動していきたい。

訂正

Vol.62 No. 4 に掲載の【新薬の紹介】「遺伝性血管性浮腫の急性発作治療薬 セベトラルスタット（エクテリー[®]錠300 mg）」は、掲載後に著者より修正がありましたので、以下の通り追加箇所を下線で示します。なお、電子版は修正済みです。

p.517 表1 脚注

^{b)} : Gehanスコア変換検定, Bonferroni調整による調整済みp値。検証的な解析結果。